

【2XXX年 地球】



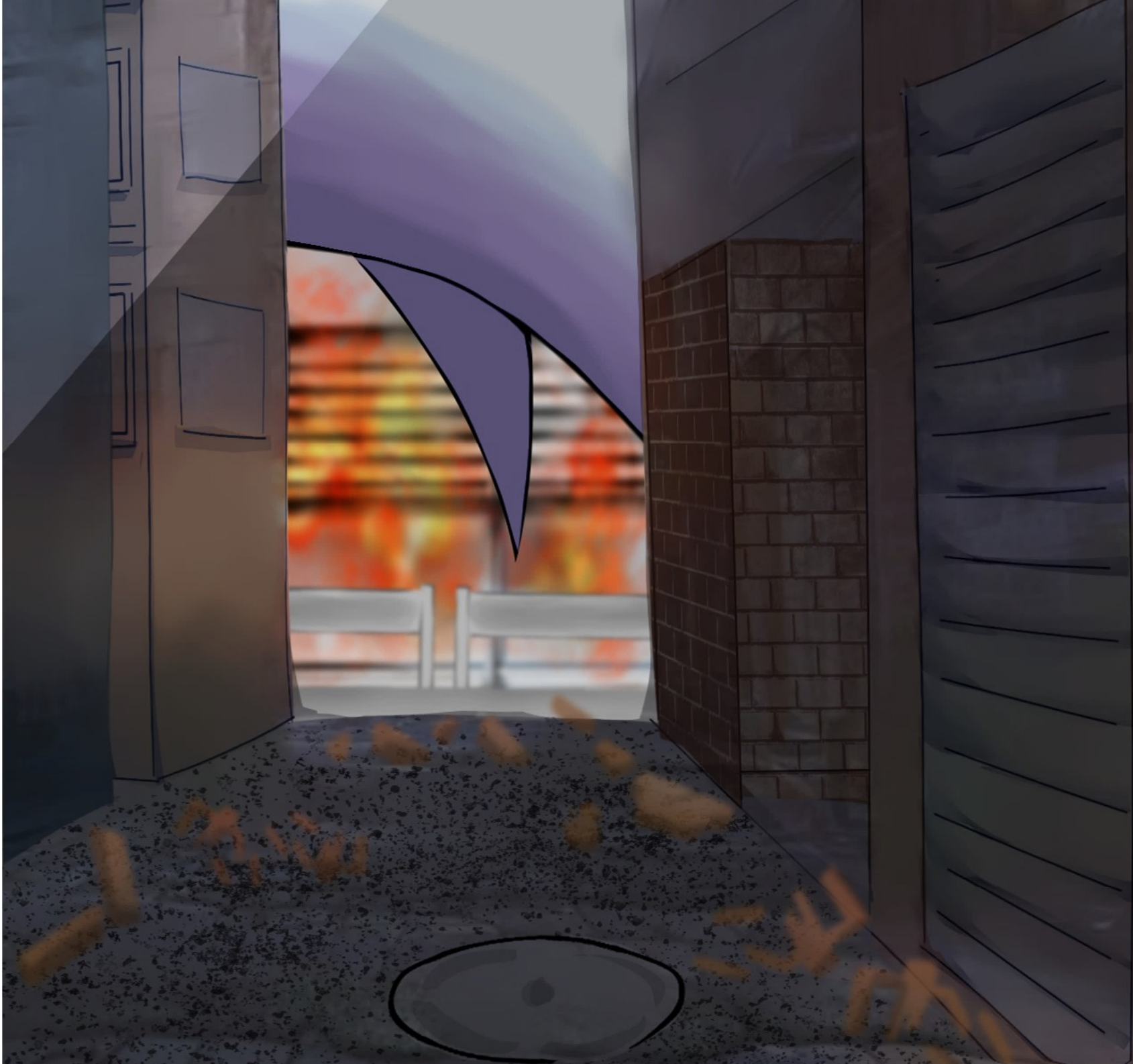
【2XXXX年 地球】



「ハアツ…ハアツ…」

僕は怪物達に見つからないよう必死に逃げていた

こんなことが起こるなんて想像もしていなかった、あの怪物達から逃げないと、あの怪物達のいない安全な場所だ！



助けて……

1秒前

人類終わったな

6秒前

死にたくない……

7秒前

怪物に囲われましたっ！
誰か助けてくださいっ！

9秒前

「僕は……どうすれば……」
安全な場所を探すためスマホを使って調べるがど「も」かし「も」助けを求める声に溢れている、「こ」なら安全という内容は「つ」も無い

『もしもし、その原生物さん？』

。。。「」がらが声が聞「える

『あなたの「」です、言葉は。。。伝わっていますよね？』

『だっ、誰なんだっ！』

『詳しく語る時間がもつたないので単刀直入に聞きます』

『我々ヴィスクティアに飼われるペットになりませんか？』

『ペットになれば他の種族に食べられる「」とは無くなると思いますよ』

『何を言ってるんだっ！』

。。。悪戯？この状況で？

『無理強いはしません、無理矢理連れて行ってもお互いにメリットがありませんからね』

『あなた達の科学力で他種族に対抗出来るとは思えません。。。』

しまった！
声を上げたせいで化け物達が集まってきた！！



ヤバイ！喰われる！殺される！

『あまり乗り気ではないみたいなので他の個体に声をかけてみます』
『ではさようなら』

どこかから聞いた声が別れを告げてきた
駄目だ……」のままたと僕は死ぬっ！

「待ってー助けてー」
僕は必至で声の主と呼びかける

『これからは我々のペットとして生きると誓えますか？』

「……はい」
背に腹は代えられない
僕は断腸の思いで返事をする

『うん嫌そうですね、やはり他の個体で……』

「このペットになりますーいえ、ペットじゃなくだもー」
「」を逃したら僕は確実に怪物に殺されると思い
声の主にペットにしてほしいと必死で懇願する

『素直なのは好きですよ、では今からあなたは我々のペットです』

その声を聞くと同時に僕の視界は真っ暗になった



「……」
気が付くと僕は今までとは別の場所にいる
僕を食へようとしていた怪物達の姿は無い

「……室内……いや、宇宙……」
窓らしき場所からは本やネットで見たことのある地球らしきものが映る

「そうです、宇宙です」
「私があなたを……」転送しました」



恐る恐る声の聞こえた方を向くと裸の女が立っていた
「…女だ、女だと思う、でも人間ではない、人類ではないという確信がある
「宇宙…人？」

「恐怖の感情は少なめですね」

「あなたの種族のメスの姿に似せておいて正解でした」
姿を似せた？宇宙人は姿を変えられるのか？

「あとは服を用意すれば完璧ですね」



ピトオ
ネトオ

身体に纏わりついてた粘液が服に変わった!!
。。。なんだこの格好は

「この格好ですか？」

あなたの文明内でペントを扱っている方々の姿を参考にしてみたのですが。。。
。。。そんな恰好はしてないと思う

「どうなんですか？。。。だいが似せられたと思っていたのですが。。。」
あれ？気にしてないか？

まずい。。。怒らせちゃったかな。。。

「怒っていないから大丈夫です」

良かった。。。宇宙人を怒らせると何されるか分からないし。。。
。。。あれ？僕、何も話してないよな。。。？



「。。。あの、僕の心が読めてたりしますか？」

「はい、先ほどあなたが心から服従すると誓ったのを確認できたので
連れてきた訳ですからね」

「さて、あなたが発狂しないように邪魔な感情を吸収し続けるのも
不味くて苦痛なのでさっさと始めましょうか」

「暴れられると怪我をさせてしまうかもしれないので先に言いますね」
「今からあなたを拘束しますけどいいですか？」

「っ、拘束？」

物騒な言葉が出てきたので思わず身構える

「あなたが考えているような」とほしめませんよっ」

「まだ今なら、母星に帰す」ことが出来ますがどうしますっ」



僕はそう言われて窓から地球を見た
宇宙から確認できるサイズの怪物達が大量にいるのが分かる

。。。の地域にいても安全な場所はなさそうだ

「大人しく。。。しています。。」

「それでは早速。。。」

宇宙船のそこら中から出てきたツタのようなものに身体を拘束され始める
足から巻き付いて……

「ふん」
僕……裸だっ、服を着てないっ！

「あのっ、僕の服は……」

「競売をする際に脱がすのが手間なので服は転送しませんでした」

「うっっ」

宇宙人とはいえ初対面の女性に裸を見られている状況に恥ずかしくなり
僕は咄嗟に両手でチンコを隠した

「……競売ってなんなん」ですかっ」

「まずあなたを同族に売ります、これであなたの飼い主が決まります」
「次にあなたを調教して飼い主さんに引き渡します」

当たり前前の「この様に言っ
……ン」そのものじゃないか
いや、あのまま怪物達に食べられるよりはまだましのはずだ

「そっ、隠さないと下をさらね」

「いやっ、」「」はちゅんちゅん」

少し抵抗するが、あえなくチンコを隠していた僕の腕は引きはがされた

全身を拘束され、まじまじと身体を見られる

「実物を見て正確な身体の特徴が分かってきましたよ」

「あなたは生殖器を刺激されると快楽の感情で満たされる種族のようですね」
「……」を中心売り出してみましようか」

宇宙人が「」からともなく取り出した棒と僕の「」を交互に見始めた
何だ？何をすることもりだ？

「これを今からあなたの尿道に入れてみますね」



「ええっ!!」

宇宙人が僕に近づいてくる

「ちゅーっ!ー待って!ーちゅーっ!ー」

「大丈夫です、もうあなたの身体の構造は把握しました」
「ん」を掴まれる、止めてくれる気は一切なさそうだ

「では中継を始めますよ」

「うるさいと印象が悪くなるかもしれないので嬌声は抑えてくださいね?」

「嬌声っ!?そんなの出る訳ないじゃないか!」

何を言ってるんだ!の宇宙人は!」

無理矢理尿道に棒を入れられてしばらく……

「♡♡♡♡♡」

。。情けない」と最初に宇宙人が言った通りになってしまった

「どうですか？気持ちいいですよっ」

「あなたの身体に合った特注品ですからね」

500

快楽で腰が浮きそうになるが拘束されているので
身体を震わせることしか出来なかった

「あっ、入札がありましたよ。これで売れ残ることはなくなりましたね」
「おめでどうございます、では続けますね」

「まっ……だめっ……」

「恐怖よりも快楽を優先する珍ペットという触れ込みで競売をしているので
もっとアピールしていきましょっね」

宇宙人の手は動いてない……
でも尿道の中で何かが動いてる

「あぁっ♡やめっ♡」

「もうほんとに快樂の事しか考えていないよっですわね」
「もっと激しくいきますわね」

「やだっ♡だめっ♡」

10000

50000

200000

ピッ
ピッ
ピッ
ピッ



ズ
ズ

ユ

ツ



グ
グ

リ
リ

ユ



「あっ♡あっ♡あっ♡」

「おおっ、良い感じですよ」

「ものすい、いい競り合いですね」

「ふっ♡」

「いや…競り合いますぎでは？」

「…これすつと2体で争つてらますね」

「…♡♡♡♡」

800000

1800000

3500000

5500000

8800000

ピッ
ピッ
ピッ
ピッ
ピッ

「…聞いてますか？」

「今あなたのご主人様が決まろうとしているんですよ？」

「ふん♡♡♡」

「…話を聞いていませんね」

「仕方ないので吸収しますか」

ズ
ズ
ズ
ズ

「はっ!!!」

快樂で曖昧になっていた意識がはっきりと戻ってきたのを感じる

「意識が飛びそうだったので今あなたの感情を吸収しました」

「あなたの」主人様が決まったら挨拶して欲しいですからね」

感情を。。。吸収した？

。。。理解が追い付かない

「困惑している様なので少しだけ説明してあげますね」

「我々は他種族の感情を吸収する」ことで生きています」

88000000

100000000

ピッ

ピッ

尿道内を這っていた何かの動きが止められた
今僕のご主人様が決まる所らしい、激しい競り合いで長引いてるんだとか

「やはり実演は効果ありますね」

。。。感情を吸収する

この言葉が本当だとして。。。いや本当だ、間違いなく吸収されたんだ
一瞬で感情を沈められたのが分かる

。。。感情を吸収して生きる宇宙人が僕を競売にかけている
自分の未来を想像して恐ろしくなってきた。。。
「これから僕は全ての感情を吸収されてしまうのでは。。。？」

「感情は吸収しますが、限界まで搾り取るつもりはありませんよ」

「そんなことしたらあなたが壊れてしまいますからね」

「。。。本当ですか？」

「吸収する感情によって味が違いますからね、

苦痛や恐怖といった負の感情は美味しくないのですよ」

「感情を吸収しすぎて精神が崩壊されると我々も困りますからね」

。。。僕の想像よりはましなのかな？

「メインは敵対種族の感情を雑に吸収しっつ」

「デザートや娯楽としてあなたみたいなペットの感情を食べる感じになると思いますよ」

そんなに悪くはないのかな？

少しだけ希望が見えてきたかもしれない

「。。。まあ飼い主に依りますがね」

「えっ？」

不安になる事を言わないで欲しい

「勝ちましたわ〜」

部屋の中に初めて聞く声が響く

「落札したのはリーベさんでしたか」

「わたくし、その子のポテンシャルを見抜きましたわ〜」

「なるほど…それでわざわざ姿を合わせたのですか…」

「では挨拶をしていただきましょうか」

挨拶の話をしているのとおりあえず挨拶をする」とした

「ええと、僕は…」

「すみません、まだ名前を決めていませんでしたね」

えっ？何を言ってるんだ

「僕の名前は…」

「あなたの名前はポチにしますわ〜」

「分かりました、では今後ポチと呼びますね」

…僕の」とはお構いなしに話が進んでいく

「さあポチ、あなたの『主人様』に『挨拶を』」

「あう、わたくしの」とはリーベ様と呼んでくださいまし」

有無を言わさないという感じだ…でも受け入れるしかない

力でも勝てないし、感情は吸収されるし、どうあがいても勝てないから

怒らせないように従うしかない…

「ポチです…よろしくお願ひしますリーベ様…」



「ちょっとセレオーネさん！、ポチが落ち込んでいますわー！」

「自分の状況を考えて気分が沈んでいるみたいですね」

「可愛そうですねー！なんとかしてくださいますかー！」

「分かりました」



「ひっ♡♡」

尿道に挿入されていた棒が再び動き出した

「今度はちゃんと絶頂させてあげますからね」



「よかった、ポチもうれしそうですわー」

「やっ♡嬉しくなんてっ♡」

「リーベさん、とりあえず絶頂させますがいいですか？」

「おねがいしますわー」

「ご主人様からの許可も出たので我慢しなくていいですよ」

「あっ♡イクン♡♡♡♡♡」



ズ
ッ
ユ
ッ
ク
ッ
ユ
ッ





意識が。。。ぼんやりしてきた。。。

「意識を失いかけてますね」

「起しますか？」

「寝かせてあげてくださいませ」

「では今後の調教の内容を決めましょう」

「ええ、よろしく願いますわ」

。。。2人の会話を聞きながら僕は意識を手放した





「確認しますね」

「調教の方針としては飼い主に従順なペットにする」

「快樂で負の感情を上書きしやすくするための肉体改造を行う」

「以上でよろしいですか？」

「セレオーネさん、従順」ということですがたまには

我が儘に甘えて欲しいのでやりすぎないでくださいましー」

「あと肉体改造をしすぎて精神を破壊しないで下さいましっ！」

「…随分念を入れますね」

「今まで色々な種族を見てきましたが、まだポチの全てを理解出来ていませんわ」

「でも間違いないくポチの生み出す感情はわたくし好みの味ですわっ！」

「そうですね…味は普通でしたけど…」

「っっまみ食いして精神崩壊させないで下さいましっー」

話し声が聞こえる、僕は…寝てたのか？

「あ！」
僕の目の前にはマンコがある

クニッ

「ではポチも起きましたので確認しましょう」

今どうなっているんだ？！
身体が動かない、動かせない！力で押さえつけられてる！！

「っ♡♡」

勃起したチンコが掴まれたのが分かる

「ポチの性器が大きくなっていますよ」

対して刺激されたわけでもないのに、勃起してしまったことを言葉に出して指摘されて恥ずかしさを感じるが、僕には隠すことも出来ない



ギーン

「まだ何もしていないのに、期待しておっきくするなんて可愛いですわ」

…本当に恥ずかしいから何も言わないで欲しい

「まだ何もしていないのに…」

「ポチの性器…性器…ちやちやちゃんっ…」

「……」

「っ！固さが増して今にも射精しそうになっていきますわ！」

「……まさかポチ」

「……」

やめて…何も言わないで…!!



「姿を似せているだけの我々を同族のメスだと認識して、欲情している……?」

「……」

ギ
ー
ン

チンコは掴まれて、目の前にはマンコ…
こんな状況なんだからしょうがないじゃないかっ!

「……羞恥、快感、興奮、期待、まだ何もしてないのに!」

「我々、いやちがいますね」

「同族のメスを意識させるため、これから私達と言ったほうがいいですね」

「あと私の事はセシオーネさんと呼んで下さい、
どうですか? 同族のメスっぽい名前でしょうか?」

「バカ可愛いですわ〜!!!」
飼い主の……リリーベ様の声が響き渡る

いたばた

「同族ではないと認識しているにも拘らず、同族を意識するバカっぷり!」

「拘束され、大切な性器を弄られるという辱めを受けているにも関わらず負の感情を出さない愛らしさ〜」

「ほら見なさいっ〜」

「変身能力無しだと」っですわよっ〜」

「どう見たら同族だと認識できるんですのっ〜」

「あの……ポチの視認能力だと今リリーベさん見えてませんよooooo」



「失礼……わたくしとした」どが」
「興奮して取り乱してしまいましたわ」

「お気になつたらず」

「それにしても」んな可愛い種族のペットをわたくしだけで独占するのは
皆「悪いですわね」
「セレオーネさん、ポチの種族は雑食種達の群れに襲われているとか仰っていましたよね？」
「一応まだ観測していますがポチの母星にいる個体はそろそろ絶滅も近いですね」



「ポチ以外に確保している個体はいますの?」

「応うがいで数組確保してはいますが…」

「少ないのではなくて?」

「マニッシュな珍ペット枠ですからね」

「これは絶対流行りますわー!」

「こんなに面白い特性を持っているのは見抜けませんでしたね」

「今すぐポチの母星の位置を教えて下さりませんか?」

「まさか戦うつもりですか?」

「当然ですわ!文明を持たない連中なんてわたくしが蹴散らしますわ!!」

「分かりました、では座標を送りますね」

「調教の開始は待っていた方がいいですか?」

「いえ始めてくださいまし、仕上がりを楽しみだしていますわー!」

「分かりました、ではお氣をつけて」

飼い主、リーベ様が嵐の様に去っていったみたいだ
というか人類滅びそうなのか…いや、人類だとあの怪物達には勝てないよな
やっぱリーベ様のペットになるしかなかったのかな…

「気を取り直して調教を再開しますね」

地球の状況を聞いて少し落ち着いていたけど、僕のチンコは相変わらず勃起したままだった

「ポチは一方的に快楽を得る訳ではないですからね」

「ちゃんと頑張ってください」主人様に気持ちよくなって欲しいという気持ちを込めて
「奉仕しないとだめですよ？」

「んぐっ」

目の前にあったセレオーネさんのマンコが僕の口元に押し付けられる

「さあ舐めてください」

ズカ

クニッ

「んっ♡♡」

突然チンコが擦られる

クニ♡

「どうしたんですか？ちやんと舐めてください」

ずっと勃起しっぱなしだった僕のチンコは少し擦られただけで射精しそうになる
舐めろと言われてもチンコに意識が行って上手く舐めることが出来ない

クニッ
クニッ

ジュルッ ジュルッ

僕はセレオーネさんに言われた通りにクンニをする

「良い感じですよ、そのまま続けてください」

「素直な気持ちの方が大事ですよ」

…セレオーネさんって性感あるのかな？

「あっ、ダメですよ疑問を抱いたら」

「嫌々やっているとすぐバレますからね」

この行為に意味があるのが考えていたらすぐにばれてしまった

スリ♡

スリ♡

レロ

レロオ

ちよつと亀頭を摘ままれてるだけなのじっ！

「勝手に射精しようとして…」

「これは少しお仕置きが必要ですね」

イクッ…もう出るっ!!

ギン

ギンッ





ドクツ
ドロッ

「ハアッ…ハアッ…」

僕は射精した快楽で満たされ…

「あ、あれ…？」

「何をされたかもう分かりますよね？」



快樂が吸収されたんだ

「正確には快樂だけを吸収しました」

「性的な興奮だけが残っている状況です」

「ぞんなっ」

「寸止めたわけではないので、おちんちんに負担はかかっていますよ？」

「感情の吸収する量とスピードは、自由にコントロール出来ますからね」

す「い虚無感だ……」

「ゆっくり感情を吸収してもらえば、今のような虚無感を感じる」とはありません」

「……そういえば途中で、私達に性感が無いのではと疑問に思っていたみたいですが」

「私達はどうでも性感の機能を追加することが出来ますよっ」

「えっ……じゃあさっきの感じはなんですか……」

「いえ、機能の追加にエネルギーを消費するのがもったいなくて、私は追加していません」

「しかしリーベさんはあなたのこととをかなり気に入っていたので多分追加すると思いますよっ」

「ホチ、これから一流のペットになるため頑張りましょうね」

こうして僕の調教が始まった